The Anthropology of Care and Education for Life:

Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies

(Senri Ethnological Studies no. 87)

Nanami Suzuki (ed.)
国立民族学博物館／ 2014 年

本書は、機関研究（包摂と自律の人間学領域）プロジェクト「ケアと育みの人類学」（2011 年 4 月から 2014 年 3 月）の成果の一部である。グローバル化・少子高齢化する社会の問題の一つは、「ウェルビーイング」（全体としての良好な生）における格差拡大である。年を重ねるというエイジング、そして移動などの変動による新文化との遭遇を生きる人々が、いかにして様々な資源を共有し幸せを感じて生きてゆけるのか、ローカルな状況に応じた共生の考え方と実践について、共助（福祉または公助、および日常生活におけるインフォーマルな共助）を対象として、文化人類学を中核とする領域横断型研究を推進することが本プロジェクトの目的であった。

本書は、高齢者や子どもなど福祉の対象として考えられてきた人々が、その実践において、どのような問題に晒されているのかについてとりあげている。このことは、第一に、公助が当該社会の主流となっているウェルビーイング観に基づき設計されているという、福祉設計について継続的に検討すべき根本的問題を照射することである。たとえば、福祉の整備がその画一化に繋がったり、あるいは、人々を 1 つの立場にラベリングしてしまい、刻々と変化する状況に対応できなくなり、共生社会への道から遠ざかってしまうという問題がある。このため本書は、福祉や共助の現場における「レジリエンス」（柔軟性）に注目し、「インターディペンデント（interdependent、相互依存）」な関係としての共助が実現される可能性について検討した。その際、具体的な対象としては、高齢化・グローバル化という変化のなかで社会福祉の充実を図ってきた国々に注目し、そこでの福祉、インフォーマルな共助、中間的団体やプライベートセクターによる支援・教育の設計などのあり方について、文化人類学、福祉研究、現場実践者の視点から提示した。

本書で明確になったことは、高齢者や子どもたちがそれまでの人生において培ってきた生き方に関わる文化的価値観が、社会によって設計されてきた福祉と齟齬を来している状況である。グレウ（2 章）やギリアム（3 章）は、文化的差異を生かしたインクルーシブな教育が謳われているデンマークの学校においても、市民社会の構成員として醸成すべき民主主義の精神を育むことに向けた教育は、とりわけ移民の男子が培ってきたリーダーシップの実践と葛藤を起こしていることを明らかにしている。さらにキエルホルト（9 章）は、活発で自己選択と責任を旨とする自律を謳歌するという理想の青年像が、ノルウェー文化の中で生きる若者達の精神を規制してきた状況を報告している。

フェルドマンら（1 章）は、オーストラリアの高齢先住民男性の場合、農場で働いて家族を養うことがウェルビーイングを構成する自律として重要であるために、病気で農場から離れたり、伴侶や家族を失った場合、心身の悪化を来すと指摘した。近年、高齢者のウェルビーイングとして「エイジング・イン・プレイス」（住み慣れたところでいつまでも）が注目され、その実現のために、在宅ケアの方法が模索されている。こうした高齢男性の問題は、在宅における手厚いケアを受けたとしても、取り戻せないウェルビーイングがあることを示しており、エイジングを生きる人々の共同性のあり方が課題となっていることを明示している。

こうした問題は、福祉国家として知られるスウェーデンについても報告されている。ジェプソン＝グラスマン（8 章）によれば、スウェーデンでは、人々の生活を支えるのは、公助のみならずインフォーマルな共助であるというテーマが共有されている。だが、エイジングとともに心身の機能が衰えて、市民社会の担い手としてボランティアをするというアクティブ・エイジングを実践できなくなると、高齢者は急速に元気をなくしてしまうという。彼女は、高齢者がアクティブであることや自律という理念ばかりを追い求めず、頼り合いながら暮らす「インターディペンデント」というあり方の重要性を指摘している。

「インターディペンデント」な関係性に関しては、福祉の設計の変化が与える影響という点からも分析がなされている。佐野（5 章）は、福祉政策全般が在宅ケアの重点化に舵を切った状況下、福祉介護の拠点であるシニア・センターで、高齢者がボランティアたちと対面することによって「インターディペンデント」な関係性を取り結んできた状況に変化が生じ、ボランティアは労働者に、利用者は被支援者という立場に分離され交流の機会が減少したという問題を指摘している。

タン（4 章）は、シンガポールでは、国家主導で、多文化社会を構成する人々が適切なバランスで居住するという住宅政策が実践され、高齢者と子ども世代が別居・近居を実現できるような、新たな住宅供給システムが推進されている状況を報告している。家族主義の伝統をもつシンガポール社会でも近年、核家族化が進行しつつあるが、こうした住宅政策では、親世代・子ども世代が、社会的サービスを利用しつつ、互いに頼り合いながら暮らすという、1 つの「インターディペンデント」への道が示されている。

本書の第二の特徴は、高齢者ケアや教育に関わる中間的団体やプライベート・セクターが試みてきた新しいコモンズ（誰でも入れる公共地）について分析を加えていることである。それは、人々が参加し、共に文化的な差異を吟味できる、教育やケアの場のことである。鈴木ら（7 章）や陳（6 章）は、カナダや日本において、NPO や学校法人によって運営されてきた、民族文化の特徴を生かした高齢者ケア施設や学校が、多様な文化的背景を有する人々に利用されている状況を報告している。それらは、高齢期や子ども期に関する情報と取り組みを重層化する場でもある。また、鈴木（10 章）は、世界各地から誰でも参加し学べる場として知られているデンマークの生涯教育の場が、文化的多様性に開かれ、画一的なウェルビーイング観や価値観を問い直す場としても活用され続けている状況を提示した。

このように本書は、少子高齢化する社会の問題点や実践を検討しながら、変わりゆく人生を生きる人々にとって、限りある資源を共有する福祉を設計することだけでは十分ではないこと、世代や文化的背景の異なる人々が出会い情報を与え合うことにより、それぞれがライフステージを渡っていくという意味の共生に向けた「インターディペンデント」が重要であることを指摘した。さらに、社会のレジリエンスに資する、多様な希望に応える共生環境を構想する場としてのコモンズと人生時間のあり方について検討した。すなわち、他者のみならず自文化に関する違和感をテーマとして対話を続けることによって、差異を活かして、社会的規範を問い直すこと、そして常に調整を必要とする共助の軸を議論し続ける具体的な方法について、考察を深めた。

鈴木七美

国立民族学博物館研究戦略センター教授。専門は文化人類学、エイジング研究。編著書に *The Anthropology of Aging and Well-being*（Senri Ethnological Studies 80, National Museum of Ethnologoy, 2013）、共編著に『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』（御茶の水書房 2010 年）などがある。